

2023年8月20日 主日礼拝

説教題「勝利ではなく和解を」箴言 16 章 6～7 節、マタイ 5 章 43～44 節

主任牧師 加藤 誠

**「慈しみとまことは罪を贖う。主を畏れれば悪を避けることができる。主に喜ばれる道を歩む人を、主は敵と和解させてくださる」(箴言16章6～7節)。**

8月は過去の戦争の歴史を振り返る機会が多く、皆さんそれぞれに戦争と平和について思い巡らしておられることと思います。ウクライナでの戦争により第二次世界大戦以降で最も核兵器の使用の危険性が高まっている時代を私たちは生きています。そんな「愚かなこと」をするはずがないと思ってきましたが、その「愚かなこと」をするのが人間であり、一度歯車が狂い始めると冷静な判断を失い「何をするか分からない私たち」であることを考えさせられています。

このような世界を神はどのように御覧になっているのでしょうか。嘆いておられるのか、怒っておられるのか、悲しみ涙を流しておられるのか。聖書が告げている確かなことは、神はこの戦争で最も痛み悲しんでいる人と一つになり、その涙と苦しみをご自分のものとされていること。同時に、武器を取り爆弾を落とし続ける人々がその狂気から解放されることを切に祈り続けておられるということです。

7月23日にあけぼの幼稚園の教職員たちが福島以南相馬にある日本基督教団小高伝道所を訪ねました。あけぼの幼稚園の同窓会会長であり日本基督教団の牧師である飯島信先生が牧会をされている伝道所です。そのお礼の手紙を書いたところ、飯島先生が『共助』という雑誌を送ってくださいました。その中で飯島先生が「今日私たちは明日への希望をどこに見出すのか?」「私たちクリスチャンが立つべき拠りどころはどこか?」という文脈の中で、かつて第二次世界大戦下のドイツでヒトラーに抵抗し殉教したボンヘッファー牧師の言葉を引用されていました。

「神が成就したもうのは、僕たちのあらゆる願いではなく、神ご自身のあらゆる約束である」という言葉です。神が実現されるのは「私たちが祈り願う平和」ではなく、「神ご自身の約束としての平和」だということです。なぜなら「私たちが祈り願う平和」はかなり怪しい「自己中心的な平和」であることが多いからです。例えばロシアの大統領は「この戦争は平和のための闘いだ」と真顔で語ります。彼は「我らに平和を、ロシアに勝利を与えたまえ」と毎日イエス・キリストの名で祈るのである。あるいは主イエスを十字架につけるに際して大祭司はこう語りました。「一人が死ぬことで、国民すべてが救われるのだ」と。つまり「イエスという男を葬ることで、国民みんなが平和になるのだ」と語ったのです。私たちが祈り願う「平和」は何と「自己中心的で、怪しい平和」なのでしょう。それゆえに、神は「私たちの願う平和」ではなく、「ご自身の約束された平和」を実現されるのです。

主イエスは十字架を前にこう約束されました。「わたしは、わたしの平和をあなたがたに与える。わたしはこれを世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな、おびえるな」と(ヨハネ14:27)。この世が与えるのと違う平和を、神は

十字架を通して実現される。私たちの現実がどれほど愚かで悲惨であっても、神ご自身が責任をもって神の平和を実現される。ここに私たちの確かな希望があります。

今朝は箴言 16 章とマタイ 5 章の御言葉をご一緒に読みました。両方に「敵」という言葉が出てきます。「敵」とは、私のことを不当に攻撃したり邪魔したりする人です。私の大切なものを傷つけ、奪ったりする人です。許せない人です。私たちはそういう「敵」が自分の目の前に現れると「この人をどうにかしてください！」「この人を変えてください」と願います。

けれども先ほどのボンヘッファーの言葉で言うならば、「私たちの願い」ではなく「神の約束」が成就するよう祈りなさいと私たちは招かれています。「神の約束」とは何でしょうか。箴言の言葉で言うなら「神の慈しみとまことによって、私たちの罪が贖われる」ことです。そして「主に喜ばれる道を歩む人を敵と和解させること」です。ここで「神は、神に喜ばれる道を歩む人に敵に対する勝利を与えられる」ではなく、「敵との和解に導かれる」と語られていることに注目したいのです。「敵に対する勝利ではなく、私たちを敵との和解に導く」。ここに神の御旨があります。

マタイ 5 章の主イエスの言葉にも「敵に対する勝利を与える神ではなく、私たちを敵との和解に導かれる神」の御旨が示されています。先ほども言ったように、私たちは自分の目の前の「敵を何とかしてください」と願う。「あの人を何とかまともにしてください」と。しかし、聖書は「敵のことを云々と語る前に、あなた自身が主イエスの愛によって造り変えられなさい」と語るのです。それはとても難しい道です。ほとんど不可能に思える道です。けれどもイエス・キリストの十字架において、神は私たちを新しい人に造り変える道を示されました。

以前にも紹介しましたが、1924 年のパリ・オリンピックの陸上 400m で金メダルを獲得した英国のエリック・リデルは帰国後、宣教師となって中国に赴きます。しかしそこに侵略してきた日本軍によって捕虜収容所に入れられて、少年たちにスポーツを教えていた時に、スティーブン・メティカフという少年が食ってかかるのです。「あのひどい日本兵をどうして愛することができるのか？」と。するとリデルは答えます。「日本兵を愛することは難しい。けれども祈ることはできるはずだ。主イエスは祈りなさいと教えられたではないか」と。戦争が終わった後、メティカフ少年は宣教師となり日本にやってきます。十字架の主の御言葉は、日本人を愛することは難しいと語った少年を、神の愛によって新しい人に造り変えたのでした。

「敵」を愛することは私たちには難しい。十字架の主にはできないことです。しかし、その十字架の主に祈ることはできる。復活した主イエスは、暗い部屋の中に閉じこもり、自分たちには何もできないと膝を抱えていた弟子たちに「あなたがたに平和があるように」と言って聖霊の息吹を吹きかけてくださいました。私たちにはできない。けれども神にはできる。私たちには不可能でも、聖霊が働かれるとき、私たちの不可能は可能に変えられる。ここに聖書の希望があります。主イエスが実現されると約束してくださった平和がわたしの上に、私と私が「敵」と呼ぶ人との間に実現することを祈っていきましょう。